
アリスな世界！

遊元 もえ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アリスな世界！

【Zコード】

Z1090A

【作者名】

遊元 もえ

【あらすじ】

男子高校生、佐久間アリスは怒っていた。その姿勢ゆえにこともあろうに男から求愛されることでも、文化祭で女装させられることが多い。そんな学校生活を送る中で、ある日異空間へと迷い込む。おかしな連中から求愛を受けつつ、もとの世界へもどそうと必死に奮闘する。無事アリスはもとの世界に戻すことができるのか・・・。

第1話（前書き）

ボーライズラブとなつております。苦手な方は「遠慮ください」。

第1話

「『めんなさい。あなたのこと……男として見れないわ……』
そう言つと、朝日がまぶしく映える中、その少女はきびすを返して歩き出した。

通算15回目。

その場には、フラレ男がただ一人……。
何がそんなに悪いのか。

嗚呼。今日も虚しいヤローの巣窟。

「私立桜林男子高等学校1年D組、佐久間アリス君。そんなにたくさんラブレターもらつといて虚しい言わない」
机の中に入っていた5通のラブレター。

ラブ・レター……

「男からラブレターもらつてもむなしいわ!!!!」

力まかせにその少年は5通のラブレターをグチャグチャに丸める。
「俺は！女のお子が好きなんだよ！！」

隣に座る悪友・瀬戸裕馬の首を絞めつつ、絶叫。

「……ゲホ、殺す気かっ！キサマ！何が女のお子が好きだ。無理だつて、名は体を表すと言わんばかりのこの少年。
くねーつの」

そう。

朝一番で女にフラれ、そして、先ほどから妙にハイなこの兄ちゃん。佐久間アリス。この途方もなく乙女チックな命名を男の子にしたのは「不思議の国のアリス」の大ファンなアリスのお母様。そして、名は体を表すと言わんばかりのこの少年。

街中を歩けば、必ず男が振り返るその端整なお顔立ち。けつして

口リ系な顔とかではないのだが、黙つていれば美人系である（黙つていれば、の話）。それを引き立てるような色素の薄いサラサラヘア（顔を隠そうと髪を長めにしているのが、よけい色氣となつていることに、本人は気づいていない）。体格は華奢ではないが、筋肉質でもない。

「お前も、どの女も隣にいたくないような顔にしてやるーか？」

でも、性格はとっても男氣。

「そりゃ 勘弁」

本気で、首をしめかねないことなどから、口を開けばただのやんちゃサンなことがわかる。

ちなみに、さつきからアリスと「コントをやつている悪友も、街を歩けば人が振り返る。こつちは女だが。特に、かつこいいー」というわけではないが、短髪が陸上部で鍛えたその体格によく合っている、183cmのデカブツ。ちなみにアリスは174cm。低いわけではないが、裕馬の隣にいることが、彼にとつての不幸とも言えるだろう。

そんな二人は今日も仲良し。

あまりの仲良しさかげんに、担任の先生も思わず、

「佐久間・・・瀬戸・・・」

その声を震わせて・・・

「もうとっくにHRは始まつとんじやー 静かにできんのなら、廊下に立つとけーーー！」

「こんなに」立腹。

しかし、月曜日の朝から隣の女子高の女の子にフラれ、1時限目から廊下に立たされる薄幸なこの少年。もちろん、薄幸っぷりはこれだけにとどまらなかつたのだ。

『女装喫茶～アリスの園～』

HRが終わり、ようやく教室に入り（めんどくさかったので、廊

下でサボっていたともいつ）、最初にアリスの目に入ってきたのは・

黒板にでかでかと書かれた、その言葉。

「な・・・何　　・・・・？」

そして、睡然とするアリスに、やんややんやと群れるクラスメート達。

「よつ！主役！衣装はまかせとけ！…すっげー可愛いやつ作ってやるからな！」

そう肩を叩くのは、家庭科クラブのヤツ・・・

「マイクは俺が担当だ！」

そう声をかけるのは、スタイリスト志望のヤツ・・・

「ま、うちちは綺麗どころの佐久間がいるからな！あの奴はテキトーに気持ち悪くなつてウケ狙つていこうぜ！」

委員長のその一言に、イエ～！…と盛り上がるクラスの男共。

「や、ちょっと？ 委員長？？話が見えないんですけどね？」

嫌な予感満載の中、アリスはできるだけ穩便に、心を落ち着かせて、委員長に問うた。

そして、そんなアリスの心境を知つてか知らずか、委員長は饒舌に語る。

「あ？お前らが廊下で立つてゐる間に、今年の文化祭のクラスの出し物が決まつたんだよ。最初は、『不思議の国のアリス』を演らうかつて話になつたんだけど、誰も話をきちんと知らないでさー。本読んだりするの、めんどくさいだろ？だから、いつそのこと女装喫茶にしてしまおうつて話になつたんだよ。そうしたら、アリスの衣装着とけばじまかせるだろー？俺つて天才 じゃ、楽しみにしてるぜ！佐久間！」

ポンっと、委員長はその少年の肩を叩く。

いい仕事したぜ！的な委員長の説明に、ブツツと何かの切れる音。

「何で『不思議の国のアリス』が絶対条件で俺が主役で女装なんだ……ざけんなテメ〜〜！」

それまでの穏便な笑顔から一変。

アリスは委員長の胸倉を掴み、前後に思いつきり首を絞め始めた。

「やめろ！――佐久間！――委員長が白目むいてる！――！」

普段からその愛らしさとは別の暴君っぷりも熟知しているクラスメート達は、連携プレーで委員長奪還に乗り出した。しかし、男気多きアリス君は、その場で暴れまくりましたとさ、ちゃんちゃん。

一方、裕馬はと「うと、

「ああ。先が思いやられんなあ。」

その騒動をよそに、役割名簿の女装店員の欄にあつた自分の名前を消し、大道具に勝手に名前を書き込むのでした。そして、大道具から、女装店員に委員長の名前をこつそり移すのでした。

「毎日毎日毎日毎日毎日」・・・・・

ぽかぽかのいい天気。今日は屋上で優雅にランチ（とはいっても、ランチの内容は売店で買ったパンであるが）。

そんな晴天のもとで総合
今日も今日まで江戸腹のアリス君でし

「うるさいな～、しかたないだろ。ただでさえアリスは目立つてんのに、そのアリスの女装が見れるとなつたら、そりや皆わきたつさ」一緒に学生ランチをしていた裕馬は最もなことを言いつつ、視線は今日発売の単行本。

「だからってなあ！知らない奴らからも、楽しみにしてるぜ、とか
言われてもキモイだけなんだよーー！」

屋上のフロансを足蹴りにしてへこませながら、アリスは声を荒げる。

「おい、学校壊すなよ。まあ、男子高は潤いがないからね~」

相変わらず、単行本から目を離さずパックの「コーヒー牛乳をすすりながら、裕馬は応える。

アリス乱闘事件より1週間。どこで聞きおよんだのか（むしろ知らないことのほうが奇跡とも言える）、アリスは廊下ですれ違う人、人から何らかのコメントを頂いていた。ただでさえ、自分の姿にコンプレックスを持つアリスは、日々怒りの拳を繰り出しそうになつたり、ちょこっと繰り出してみたりしながら毎日を過ごしていた。そして、人だけには飽き足らず、こうして公共物にまで損害を与えていたのだつた。

そんな。

文化祭も1週間後に迫つたある日。

学校中がにわかに活気つき、どのクラスでも準備が着々と進んでいた。アリス達のクラスも例外なく、あーだこーだと毎日大道具やら小道具、衣装や会場係りの人間達が遅くまで準備にいそしんでいた。そんな中、

「佐久間！今日衣装合わせするから、放課後残つとけよ~」

アリスは文化祭が近付くにつれ、鬼気迫る様相になつてきていた。そのため、今まで準備にほとんど参加しなくても誰も何も言わなかつた。まさしく、触らぬ神に祟りなし。である。

しかし、文化祭も間近のこの時期。

衣装合わせだけはしておかなければならない。

勇気ある委員長は

アリスの返答を聞く前にアリスの怒りを恐れて逃げた・・・。

「俺は狂犬かつての・・・」

そう言うアリスだが、

手はきつちり、拳を作つてているのだった・・・。

委員長を見送り、アリスは一人思いふける。
いいかげん、腹はくくつてゐる。

だつて、皆でする出し物に・・・

いつまでも嫌だつて、だだこねれないし。

「ま！似合つて決まつたわけじゃないし！他の奴のほうが似合つてる奴がいるかもしないしな！！」

アリスはそう、自分に言い聞かせながら放課後の衣装合わせに臨むのであった。

「・・・・・」

金髪のゆるくウェーブのかかった髪に、青いカチューシャ。大きな丸襟の白いブラウスに、青いワンピース。ワンピースはウエストの部分が絞つてあり、膝が少し顔を出すその裾は下から白いフリルがのぞく。そして、白いハイソックスに、黒のローファー。

まさしく、鏡に映るその姿は、不思議の国のアリスである。

「・・・・・違和感がない・・・」

アリスのクラスは今日は衣装合わせのため家庭科室を借りて作業をしていた。そして、ブーたれながら家庭科室に足を運んだアリスは、衣装係りからアリスの衣装一式を渡された。そしてそのまま、家庭科室の一角にある準備室で着替えることとなつたのだが。

アリスは、着替え終わるとその場にあつた鏡に映る自分の姿を見て、やりきれなさを感じた。

その姿はもう、いいようもなく、パーfectだったのである。

しかも、これからこの恥ずかしくも似合いすぎる姿をクラスの人間にお披露目。さらに、文化祭当日には、一般大衆にさらけ出す・

・・・

「・・・・・ぶつこわすかな・・・」

“何を”とはあえて言わないが、そんなちょっと怖い考えが浮かぶのも、まあ、大目に見ることで。

アリスは、その場で数回深呼吸をすると、腹をくくつて準備室を出た。

しかも。

「これでビーだーだー!? 文句ねえ美しさだらーー!」
仁王立ちしての、半ば自暴自棄状態。

準備室の外では、衣装係りが待機しており衣装の合意具合を最終確認することになっていた。そして同時に、マイク担当も来ていて、どんなマイクが合うかも検討する予定だった。そのため、アリスが着替えるために準備室に入った時は、外の家庭科室には作業している人間、他の衣装合わせをする人間も含め10人前後がいた。

それが、

アリスが着替えて出てくるまで約5分。

家庭科室には、誰もいなかつた。

「・・・あ?」

さつきまでは、がやがやとしていたその部屋は、うつて変わつてシンとしていた。

「何で誰もいないんだ?」

アリスはあっけにとられ、部屋の中を歩き回る。

「佐田ー? 飯田ー? オーイ。着替えたぞー。野口ー?」

クラスメートの名前を呼ぶが、返事がない。

「何だよ。皆して連れションかあ?」

言いながら、アリスはその情景に何か違和感を覚えた。

辺りを見回す。途中で放棄されているミシン。雑に置かれた衣装の数々。投げ出された、糸と針。

どこかへ行くにしては、作業工程が中途半端である。

「おいおい、何だつていうんだよ・・・」

アリスは薄ら寒さを覚えた。

「おーい! 佐田! 飯田! ーーどこだよー!」

アリスは家庭科室を出て、廊下でも呼んでみるが返事がない。

おかしい

何が？

すべてが

すべて？

すべて？何が？どこが？いつもと違う？違う？何が？

「何で・・・こんなに静かなんだ・・・？」

今は放課後だが、文化祭前なのでかなりの人間がまだ残っているはずだった。ここは家庭科室だが、下の階には2年生の教室もある。それに、外で部活をしている人間も少なからずいるはずだった。いつもは気にしていなくても、自然と耳に入ってくる音、声。廊下を走る音。誰かとしゃべる声。テンション高く歌いだす奴、何かを作る音、罵声、奇声、歓声等、等・・・。

それらが今、何も聞こえなかつた。

「は・・・？どういうことだよ！」

アリスは、窓から階下のグラウンドを見渡すが誰もいない。

何で・・・何で誰もいないんだ！？声も、音もしないって・・・
どういうことだよ・・・！

アリスは、わけのわからない不安に襲われ、走り出した。

階段を降りて、2年生の教室の扉を開ける。しかし、そこも無人であつた。家庭科室と同様、作業を放棄した状態で人だけがいなくなっていた。

次の教室を開けても、次の教室を開けても、誰一人として見当たらない。

「気味ワリイ・・・どうなつてんだよ・・・」

アリスは、2年生のすべての教室を回つたが、やはり、誰もいなかつた。

アリスは、とうあえずもう一度家庭科室へ行つてみようと階段を昇つた。

「・・・は？・・なんだよ・・・これ・・・」

西階段を昇つて右に曲がる。そこには家庭科室があつた。

“さつきまでは”

家庭科室があるはずのあおの一角にあつたのは、家庭科室などではなく、別棟にあるはずの職員室だつた。

「も・・・意味わかんね・・・」

アリスは職員室前の廊下で固まつたまま動くことができなくなつた。

「ここはどこ？職員室？何で？家庭科室へ続く階段を昇つてきたはず？何が？どうなつて？」

アリスの頭の中はパニックで。

何を考えていいのか。むしろ、頭が考えることを拒否している。

思考停止。

「あれ？人が残つてる」

その時、いきなり後ろから声をかけられる。

「！」

アリスは驚いて後ろを振り向く。するとそこには、白いカッターシャツに黒のスラックスをはいた男が立つていた。歳はアリスより二、三歳上だろうか。身長はアリスより少し高いくらいで、黒髪に中性的な感じだが、飄々とした表情をしている。

アリスは何よりもまず、人がいたことにホッとした。

「あ、あの・・・」

そして人を見つけると、今度は自分が慌てふためいていたことが

恥ずかしくなり、アリスは何か言つてこの場を取り繕おうとした。

「君、名前は？」

そこに。唐突に、その男は聞いた。

「ア・・・アリス！佐久間アリス！！」

それに、何故か反射的に答えるアリス。

その名前を聞き、男は少し考えてから、口を開いた。

「アリスか。ふーん。可愛い名前だね。男につける名前じゃないけど」

クスクス笑いながら、男は話す。アリスは、人の氣にしていることを・・・と、赤くなりながら、名前を出したことを少し後悔していた。

「しつかし、可愛い格好だね～。ホント、不思議の国のアリスみたいじやん」

にやにやとアリスの全身をなめまわすように見ながら、その男は言ひづ。

そう言われて、アリスは自分の格好を思い出した。
「今までなく。

赤面。

「こ・・・これは！文化祭の衣装合わせでつ・・・！」

真つ赤になしながら、アリスはしじろもじろで衣装の説明をする。

その様子は、

いつもズボンばっかりの女の子が、初めて男の子のためにオシヤレをしてスカートをはいた時、それを指摘された時そのものであった。

「クク・・・、いいよ。最高じゃん。アリスね。いいシチュエーシヨンかも」

「は？」

一人、腹を抱えながら笑うその失礼な男に、アリスは。

一人で納得してんなよ。だいたいアンタは誰なんだよ。と、その胸中でつぶやく。

その男は、そんなアリスの思いを悟ったのか、

「あ、ごめん、ごめん。俺はリアンね。」

目尻には笑いをこらえすぎて涙が・・・。

そんなふうに自己紹介をすると、よつやく笑うのをやめ、アリス

に向き直る（表情は相変わらず飄々としているが）。

「あのさー、信じられないと思つけど、とにかく話を真面目に聞いてくれるかな？俺さ、こっちの人間じゃないんだよね～」

再び、笑顔で爆弾発言。

暗転。

～ 続く～

第1話（後書き）

初めてなので、いたらない部分もあったと思いますがどうだったでしょうか。続きたくともがんばって書きたいと思こますのでどうぞよろしくです！

第2話（前書き）

おかしなことに巻き込まれた予感・・・これからアリスはどうなるのか・・・。
「ボーアイズラブ」となっていますので苦手な方はご遠慮ください。

第2話

ああ、この人、頭ヤバインだ……。

アリスは再び思考停止した頭の中を、本能的に感じた。

あれかな。今若者に多い、ドリppingとか？

はは、イッちやつてるで？ふふ。徐々に思考回復……でもないか。
・・。

「いっとくけど、俺はいたつて正常だからね」

そんなアリスの考えを感じ取ったのか、そのリアンといつ青年はきつちり釘をさしてきた。そして、釘だけさすとさつと話を進めだした。

「えっとね、まあこじはいつもアリスがいる世界とは少し違うんだよね。でも、まったく違うわけでもない。」

アリスはその頭上に？を飛ばす。ちょっとまだ、頭が起きてないんだよね。

それに気付いてか気付かずか、リアンはそのまま話を続ける。

「“シンクロ”っていうのかな。普段、俺の住む世界とアリス達の住む世界は接点を持つことなく、何の接触もなく時を過ごしているんだ。まったく別の次元の世界だからね。だけど、今のこの状態つていうのはお互いの世界が微妙に被さつて接触している状態なんだ。で、本題はここから。この“シンクロ”状態を作り出しているのは俺達の世界の親玉なんだけど。その理由が暇つぶしつてやつ？それで、もちろん、“シンクロ”を解くことはその親玉にしかできない。でも、どうも親玉はこの状況を快適に思つてゐみたいでね。今のところ“シンクロ”を解く気はないみたいなんだよね。」

にここにこと微笑みながら、リアンは現実離れした話を繰り広げる。

「“シンクロ”状態が続くと、アリスももとの世界に戻れずにこの“シンクロ”した世界にい続けることになるわけ。」

アリスの頭は、リアンの話についていけず、パンク寸前である。

俺の世界？

アリス達が住む世界？

シンクロ？

親玉？

アリスは呆然とその場で立ち尽くす。

何が真実で
何が嘘？

「わけ・・・わかんね・・・」

アリスはぽつりと、そつづぶやいた。

そのアリスを横目に、リアンは笑みを浮かべながらアリスの手をとる。

「簡単なことだよ。アリス。お前がこの“シンクロ”を解けばいいんだから」

アリスの手の甲にキスを落とし、リアンはそつづつた。

「シンクロを・・・解く？」

アリスは不安げな瞳でリアンをみつめながらこたえる。リアンは顔を上げ、アリスと向き合つ。

「そう。親玉に話をつければいいのさ。倒す、とかね」

そのリアンの言葉がアリスの本能を揺さぶる。

真実はどれで、嘘はどれ？

どうしたらいい？

どうすれば・・・いい？

「アリスだけなんだよ。それができるのは」

「俺だけ？」

「だって、この“シンクロ”した世界に来るのはアリスだけなんだから」

「え？ ジャあ・・・他の奴は？」

「そうだ。この学校から消えてしまった生徒はどこへ行ったのか。

「さあ？ でも“ここ”にいないことは・・・」

リアンはアリスを見据え、こたえた。

「空間のはざまをさまよつてるんじゃない？」

気が付くと、世界は変わっていた。

他の世界と“シンクロ”してしまった世界では、建物はいつもと違つ造りをしていて、何より人がいなくなつてしまつた。

君はただ一人、世界を救うことができる勇者なんだ。

世界をこんなことにした悪の親玉を倒して世界を元に戻せ！
そして、友達を救うんだ！

「な～んて、簡単に言ひとそな感じ？ うわ～何かのゲームみたい
じゃん」

今まで真剣に（？）話していたその男は、
そう言いながらケラケラと笑い出した。

俺は・・・

一発殴らうかと思いました・・・

「いやいや、ごめん。でも、話したことは本当。だからさ、親玉を見つけて早くどうにかしてよ。俺も元の世界に帰りたいからや～」
身の危険を感じてか、謝つてはみたものの、まったく緊張感のないリアン。

そんなリアンに対し。

「リアン・・・さん？ がどうにかできないの？ その、親玉に話つけ

る、とか」

アリスは、じいじへ真つ当な質問をした。

「えー！だつてめんぢくせこじやーん」

そして、ある意味。

予想通りの回答が返ってきた。

あはははーといふ全開の笑顔つきで。

もう・・・殴る気力もねえよ・・・。

アリスは、深いため息とともに天井をあおいだ。

「とりあえず・・・あんたの言つこと信じてその親玉を探すしかな
いってことだよな」

アリスはリアンを正面から見据え、そつそつぶやいた。
リアンの言つてることが本当かどうかはかなり怪しいが。今、こ
の学校がおかしいのは本当である。むづ、何かに縋るしかアリスに
はないのである。

「俺は勇者でーじには夢ー。」

そう思つてやるしかない。

アリスは腹をくくる。

「夢つてアンタ」

結局納得してこらのかしていなか。そんなアリスの様子を見
ながら、リアンは苦笑する。

「まあ、めんぢくせこじやんでも少しほんぢうかりや」
ポン、とアリスの肩に手をおき、リアンは言つた。

「本當ー?」

リアンの言葉に、アリスは身を乗り出す。

そんな、わらにもすがりたい心境なアリスに対し。

「いや、ほんとに少しだから」

わらほどにも役に立たなぞうな。

リアンの返答に。

・・・アリスは何度目かわからない殺意を覚えるのであった。

「ま、アドバイザー程度に思つてくれたらいいから。俺のことは」

そんなアリスの殺伐とした雰囲気を軽く無視した、相変わらずの

飄々とした態度に。

「じゃあ、アドバイザーさん、さっそく何かためになる」と、教えてくれねーか?」

今にもつつかかりそうな態度でアリスは聞いた。

「ためになるねー・・・。あ、基本的にパーティーは組めないから一人でがんばってね」

それに関しては、もうまったく期待しておりません。

「それと、親玉の居場所だけど

たたたたたた

「?

何かが通り過ぎる音がし、アリスがそちらを振り向くと、3歳くらいの黒い服を着た金髪の男の子が走っていた。瞳が大きく、とても愛らしい。

が、

その頭には、ぴょこんと、ウサギの耳がついていた。

・・・なぜ?

「な・・・?!

アリスがそれに目を奪われていると、

「あ、いたいた。あいつ、バニーっていうんだけどね。バニーが親玉の居場所知つてるから。捕まえて案内してもらひうといいよ」

ぴょこぴょこと独特な動きをする、可愛いらしいバニー君。

「あいつが・・・?」

その時、

アリスとバニーの目が合ひ、

次の瞬間。

「きゅきゅ～～」

バーーは全速力で駆け出した。

「な・・・・？ま、待て～～～！～～！」

それを慌ててアリスが追う。

「がんばって～！アリス姫～！」

それをヒラヒラとリアンが見送る。

アリスは全速力で階段を駆け下りるバーーを追いかけ、階下に消えていった。

「しつかし・・・」

一人残つたリアンは。

「いつまであの格好でいるんだろうねえ」

どうでもいいことを気にしていた。

さてさて、何やら大変なことに巻き込まれてしまったアリス。女装したまま、まさに『不思議の国のアリス』の『くわサギことバーーと追いかけっこ』。さあ、無事にこの世界を解放することはできるのか。がんばれアリス！負けるな！アリス！！

そんなナレーションを入れている間に、アリスはといえば・・・

「はあ、はあつ・・・！」

結構。

俺。

全速力で走つてんだけどな～～～！～～！

バーーを追いかけ全力疾走中。

しかし、アリスとバーーの距離は縮まらない。どころか、下手をすると開いている。こんな格好をしていても、アリスは走らせれば

百メを11秒台で走る。

なのこつ・・・・・！

なんだつてあのウサギまがいに追いつけねーんだあ！！！

アリスは世の中の理不尽を「こんなといふで痛感しながら、バーーを追いかけるのであった。

「にしても、本当にむちゃくちやな世界だなー！」

いつも常識がまったく通用しない。その角を曲がれば一年教室・・・かと思えば、生物室。音楽室の扉を開けると、そこには図書室と、もう学校の中身がぐちゃぐちゃである。

リアンの言ひことを8割方嘘だと決め付け、どつきりだと思つていたが、どうやらコアンの話は本当だったようだ。アリスの頭はその事実について深く思い悩むことをやめ（頭が思考を拒否しているともいう）、その校舎内を走り回る。

その中を、当のバーーは軽快に走つてこぐ。そして、廊下の一角をぴょーこと曲がる。

「にやろー待て・・・・！」

アリスが追つて曲がった所には・・・

「な・・・体育館～？」

なぜ、この学校の造りで、一階に体育館ができるのか・・・。アリスはその疑問に。

フタをした。

「とにかく・・・今はあのウサギまがいを・・・・

そう勝手に納得し、アリスは体育館へ入る。

ダンダンダン

キュキュッ

「ヘイ！ブラック－バスや！！」

「オッケ～～！いくで！ホワイト！！」

ザシユ

切れのいい音とともに、バスケットボールがゴールの網をくぐる。

「ヒューー！絶好調やん、ホワイト！」

「阿呆！わいはいつでも絶好調や！！」

そこにいたのは、同じ顔をしてエセくさい関西弁を話す二人組の青年だった。背は高くはないが、低くもなく、ほどよくかつ丁寧に部類に入るであろうその二人が、なぜか三枚目チックなのは・・・このアホっぽいノリのせいだろ？

何はともあれ。

リアンについての人との遭遇に。

しばし、呆然とするアリス。

そんなアリスに気付き、一人は気付いて近づいてきた。

「ひえ～。こらべっぴんさんやなあ。お姫さん

「ホンマ、かわええな。名前何ていうん？」

そのブラックとホワイトなる二人は珍しいものを見るように上から下までアリスを眺めながら声をかける。

「さ・・・佐久間アリス・・・。あんたたちは？」

ようやく少し回転してきた頭で。

ちょっと引きながら、アリスは答える。

「アリスやて。よう似合つてんなあ。わいはブラック

と、黒のTシャツの男。

「わいはホワイトや。双子やねん

と、白いTシャツの男。

何てわかりやすい・・・。

アリスは痛切にそう思った。世の中の一卵性双生児が皆こうだつ

たら・・・すぐ見分けもつくし、間違うこともないよなー、と。全
国の一卵性双生児の方々に何だかとても失礼なことを考えながら・
・。考えの途中で。

アリスはようやく本題を思い出す。

「あー！バーー！バーーはどう行つた！？」

アリスは・・・

体育館と人にびっくりしてバーーを追いかけるのを忘れていたの
でした。

「何や、バーー探してるん？」

ブラックの方が、アリスのその発言に反応した。びづやら、バーー
のことを知つてゐるらしい。

「ああ。シンクロを・・・解いてもらおうと思つて・・・えと、
ブラックとホワイトも、あっちの世界の人・・・だよね？」

アリスはいまいち、ここで会つ人間とどう接したらよいのかわか
らず、控えめに質問をしてみた。

「せやせや。でも、向ひの世界もちょっと飽きたし。別にこのま
までもええかなって」

バスケもできるしなーと、ブラックは明るく笑う。

「いや、でも、俺は戻つてもらわないと困るし・・・」

その能天氣さに、いいわけないだろ。と内心思いつつ。

「寂しいなあ。せつかく世界を超えて会つたんやし、仲良しじょ
りで？な。アリス姫」

ホワイトは、そう言つとアリスにガバッと抱きつぐ。
ちょっと警戒心の落ちていたアリスは。

「ああ、ええ抱き心地！」

「ぎやああーーー！」

抱きつかれてから叫ぶまでのしばらくの間、自分の状況が理解で

きていなかつた。

正氣に戻り、叫び、腕の中で暴れるアリスをよそに、ホワイトはアリスにすりすりする。

「あー……するこで！ わいもアリスといひやこひやしたい……」
そう言つと、ブラックもその上から抱きついてくる。

「ぎや……」

「ほんまや～ええ気持ち～！」

二人の男に抱きつかれ、しかもスリスリされたり、ベタベタ触られたり。

「ちよつ・・・！ 僕は男だつて……離せ……！」

ホワイトの左頬に右ストレート。

「ぐはつ……」

「ああ……ホワイト！？」

やつと解放されたアリスは肩で大きく息をする。そしてもう一度、二人に向かつて

「俺は、男だ……」
と言い放つ。

しかし

「それくらい見たらわかるわ！」

「それを含めてかわええゆーとんじゅー……」

あ、何かめまい……。

「しかし……右ストレートは効いたわ……。なかなかの腕やな
「慣れてますから」

おちやらけ男はさらつと流し。

しかし。

ボクシングなど、格闘系の習い事もしてないのに慣れるつてビーゼ。

「まあ、ええわ。それより、アリス、バー探してんねやろ？」

「あ、はあ」

いきなり変わった話の矛先に、アリスはついていけず生返事をする。

「どこにあるか、教えてもええで？」

さつきまで追いかけていたバー。それを、見失ってしまった。あのすばしっこさでは、やみくもに探していくには次はいつ見つかるかわからない。

でも、元をただせば・・・

この一人のせいで見失ったと言つても過言ではないような気がする・・・。

「えー？どこー？どこにいるんだ！？」

とにかく、今はこんな変なのに絡まれている場合ではない。居場所を聞き出してさっさとバーを捕まえよう。アリスの思考はそこへ行き着く。

「フフ・・・・ただじやあ教えられへんなあ」

ホワイトが、何か含んだような笑みを浮かべる。

「そうやなあ・・・・チューしてくれたら、教えたつてもええで？」

にこにこと、ブラックが言つ。

「な・・・・！」

チュー

イコール キス

キス

イコール 接吻

アリスはその言葉を理解するまでにゆうに30秒かかった。もちろん、キスの経験は・・・ない。悲しいかな。

それが。

何をどう間違つたらファーストキスの相手が男になるのか。

しかも。
2人も。

「ああああ・・・あほか～～！～～できるかーそんなことーーー！」
そのシーンと感触を想像し、鳥肌を立てながらアリスは絶叫する。

しかし。悪魔の笑みを浮かべる双子はひかない。

「え～？ええ やん。チューくらー。減るもんやないし～？」

「それにや、はよせんと困るのはアリスやろ～？ほら～バーーが捕まらんよ～なるで？はよ追つかけな」

じり。

じりと。

ホワイトとブラックはアリスとの間隔をつめてくる。

「ほら。どないするん？」

「もとの世界に戻したいんやろ？」

それは。

もとの世界に早く帰りたい。もういんな夢みたいな世界やホモな奴らはいじめんだ。

でも。

だからって。

「やっぱ男とキスなんかできるか～～～！」

とりあえず。

顔の近くにあったブラックの顔面にお得意のパンチを繰り出す。

「さやふ～！」

「ああ～～～ブラック！？」

もろにパンチを受けたブラックだが、持ち前の（？）タフセグンビのよろに持ち直す。

「う～。ええパンチや・・・。効いたわ・・・」

やはり双子。渾身のパンチを受け、同じよつなことを言つてゐる。

「可愛ええ顔して2度もパンチ食らわせよつて・・・ま、そんな

氣の強いところも好みやねんけど…で・も！条件は変えへんで…！チ
ユーセナバーーの居所は…・・・

「きゅう～？」

「教えへんで…・・・・は？」

2人にせまられ、アリスの後ろは体育館の壁。その向かいにアリス
を囲むようにブラックとホワイト。

そして。

その2人の間に…・・・

『バニー！！！？』

そしらぬ顔でたたずむは。

捜し求めるバーー君であつた。

そして、3人からの視線をあびると…・・・

「きゅきゅ～」

ぴょんぴょこと体育館の扉に向かって走り出す。

「ま！待て！バニー！」

その後を、アリスはここぞとばかりに追いかける。

もちろん。

後に残つたのは…・・・

「そ・・・そりやないて・・・バニー・・・」

それぞれアリスに一発ずついただいた、

ホワイトとブラックであつた。

さてさて。オチもついたところで。バーーとアリスはと言えば。

「きゅ～きゅ～！」

ぴょんぴょこぴょん

たたたたたた ぴょん

独特のテンポと、それに見合わぬ速度で走るバーーと。

「待て～！」

相変わらずその美しい髪とスカートをなびかせながらそのバーー

を追いかけるアリス。

そして。

相変わらず差は縮まらないのであった・・・。

くそ・・・むりいがげんにしてくれよー！

「は・・・はっ・・・！」

アリスは縮まらない差に苛立ちを感じ始めていた。

いつになつたらこの追いかげーのは終わる？終わるのか？
もし終わらなかつたら？
ずっとこのまま？

一生？

頭をよぎる、最悪のシナリオ。

「一生追いかつけこなんて冗談じゃねー！」

・・・苛立ちを感じながらも・・・アリスはたくましく走り続ける
のでした。

そして・・・。

「あのウサギまがいへ捕まえたらその耳むしってやるー」
何も悪くないであら（？）バーに怒りの矛先を向けるのであ
つた。

～続く～

第2話（後書き）

どうだつたでしょつか。まだまだいろんなキャラが出てきてアリスに絡んでいきますのでお楽しみに！

第3話・庭とアコスヒコアンとの仲介ー(前書き)

ボーネズラブですので、苦手な方は「遠慮ください」。

第3話・庭とアリスとリアンとの再会！

体育館を出てからどれくらい走り続けたのか。

アリスは階段を昇つたり降りたり、廊下を駆け抜けたりとある意味どの運動部よりもキツイ運動を行なつていた。しかも。全速力で。だが、いくら体力に自身がある者でもこれだけ走れば疲れが出てくる。

しかし。

「何であのウサギは・・・走るスピード変わらないんだ・・よつ！」
本日何度も目の不満を口にしながら、前方を駆けるバニーを追いかける。

そして。バニーは調理室の扉のすきまをするりと抜けていく。その後をバニーを追いかけアリスも調理室に入る。

そこは・・・。

調理室ではなく、いうならば・・・ジャングルであつた・・・。

大きく生い茂る草木。ツルをまく植物。見たこともない花も咲いている。真っ赤な大輪の花に群生する白や黄色の小さな花。木になつているのはこれまた見たことのない黄緑の実。

「ど・・・ど・・・こ・・・こ・・・？」

もしかして、まだどこかにシンクロした！？

しかも今度はジャングル！？しかも怪しげな植物がつ・・・！アリスは途方もなく広がるジャングルに、その場に立ち尽くす。むしょうに泣きたい気分になつたのは・・・いたしかたないと言えよう・・・。

そんなアリスの横をバニーは、相変わらずの様子でたたたと走り去る。

「あーバ、バニー！」

この際、3歳児だろうがなんだろうがどうでもいい。誰かがそばにいないと不安なのは仕方のないことであろう。たとえそれがちょっと・・・意思の疎通が不可能な相手でも・・・。アリスは那个ジヤングルの中を、バニーについて走り出した。

雑木林のように木々の生い茂るその中を必死に走つて行くと、急に木々がなくなり、小さな丘に出た。その丘には一本の大きな木がたつてある。アリスは息を整え、汗をぬぐいながらその丘のてっぺんにある木を見上げる。

「おつきな木だなう・・・」

次に、バニーはと見渡すと、バニーはその大きな木に向かつて走つている。それを見て、アリスはバニーを追いかけるためその木を目指して走り出した。

その木は近くで見ると樹齢200年くらいたつてそうな大木で幹の太さは大人が5人くらいないと囲めないくらいだった。バニーは何が楽しいのか、木の周りをぴょこぴょこ回つている。

・・・何が楽しいんだ・・・。」のえせウサギは・・・。

何で。

ちよつとバニーへのイラつきを控えめにかもし出しながら。

「おい、バニー・・・」

そのバニーをとめようと、アリスがバニーに話しかけた時。

「何をしてる?」

低い、重低音がアリスの耳に響く。

びっくりしてアリスが振り返ると、いつの間にかそこには一人の男が立つていた。身長が高く、裕馬より大きい。190cmはゆうにありそうである。服の上からはわかりにくいが、その身長に見合うだけの筋肉がしなやかについている。黒髪に黒い目が深く影を落とし、それがその男の端整な容姿を引き立たせる。黒いズボンに深い青のシャツ。そのシャツの上には革のジャケットをはおつてている。そこに、くわえたバコがきれいにハマっている。

その男はタバコの煙を一度はくと、もう一度アリスに言った。

「何をしているんだ？」

相変わらず耳に残る重低音に、体がビリビリする。

「あ・・・俺は・・・」

なぜか緊張して声が枯れる。

威圧感だ。

この男からはものすごい威圧感を感じる。まるで、すべてをねじふせるような・・・。

アリスは人形のようにその男から田^たが離せなくなってしまった。固まつたように、動けない。

「・・・！ああ、悪い！」

その男は急に何かに気付き、足で踏んでタバコの火を消した。すると、そのタバコを覆うように足元の草が伸び、タバコはその草によつて地面に吸収されてしまった。

「ここにある植物から作ったタバコだ。地に戻った」

まるでアリスに説明するかのようにその男は言った。

「もう大丈夫だろう」

そう言われると、アリスは今までの緊張が解かれたかのように体が動き出す。

「あ・・・え？ 大丈夫って・・・？」

声もすんなり出る。

「こここの植物にはそつちの世界にないものが多い。煙を吸つて体が一時的に麻痺をしたんだろう。一種の中毒症状だ。元をたつたから、もう心配ない」

「そつちの世界つて・・・」

「なんとなくだ」

アリスが別の世界の住人だと、何となくわかつたらしい。・・・。何となくつてつて・・・。リアンよりひどいんじゃ・・・。とアリスが思つたかどうかはさておき。

「で？ 何をしているんだ？」

体の麻痺もとれたところで、その男は本題に入る。

「えっと・・・シンクロを解いてもらうのに・・・バニーを捕まえなきやいけないんだけど・・・、バニーがここに逃げ込んだから、それを追つて・・・」

少ししどろもどろになりながらアリスは答える。

その様子をじっと見ていたその男は。

いきなり、アリスの顎をつかむと、上を向かせる。

「・・・お前、名前は？」

アリスはそれを振り払い、その男を睨む。その男は睨まれているのに楽しそうに口をゆがめた。なんだか、嫌な感じを受けながら、アリスは名前を言つ。

「佐久間・・・アリスだけど・・・あなたは？」

「ガーデンだ」

無表情に、答える。

「庭？」

「・・・ガーデンだ」

・・・「このネーミングセンスってどうなってんだよ・・・。

アリスがそう思つのも、無理はないってことで。

「アリス」

アリスが一人でそんなことをブツブツ考えていると。

ガーデンなるその男は・・・。

まるで shall we dance? かのよう。

ひらりとアリスの腰を抱くと、その端整な顔をアリスの顔にぎりぎりまで近づけ、これが女ならいちこりでクラッといっちゃんその表情に。あの、腰にくる重低音で。

「俺の愛人にならないか?」

言つたセリフがそれかよ!と、つっこみたくなるような言葉を吐いてくれた。

「誰が愛人だ!てか、離せっ・・・!俺は男だつつの!..」

渾身の力でガーデンを遠ざけようとしながら。アリスは本日何度も

目かの自分の性別を公開した。

ていうか！何でどいつもこいつも！俺を女だと思つんだよ！失礼だつつの！！

内心ご立腹気味なアリスだが・・・悪いのはあきらかにお前だろうと。アリスの心の叫びを聞いた人がいたならば、そう言つたであろう。

「だから？愛人になるには何も問題はないだろ？溺れさせてやるぜ？」

またそんな。女の子が卒倒しそうな笑顔で。

女の子が一発で落ちそうなセリフ言つて。

アリスもほら。男なのに、その色気にふいつちをくらつて赤面。「・・・！？！だつ・・・！？！ていうか！あ、愛人つてことは妻がいるんだろ！？妻が！？！」

慌てて理性の壁を持つてくる。

「俺の妻は寛容だからな。愛人を何人作つたところで支障はない」さらりと言つその男に。

そんなに何人もいるんかい！と。フラれ続けているアリス君は。ちょこっと殺意を抱いたりしてみたり。

「妻はよくても俺が嫌なんだよ！？俺はバーを捕まえて！シンク口を戻して！元の世界に戻つて普通に女の子と恋愛するんだつーの！！」

とりあえず。怒りにまかせてきっぱり愛人の座は辞退する。

「残念だ」

それだけ言つと、すつとガーデンはアリスから離れた。アリスがそれにほつとし、胸をなでおろした瞬間。唇に、柔らかい感触。

「・・・！？」

その次に感じたのは、舌で唇を舐められる感触。微妙なタッチで唇を舐められただけで。

アリスの背中をぞくぞくしたものがかけあがる。

唇を丹念に舐めあげたら。盛大にチュッと音をさせて。ガーデンはアリスから唇を離した。

「通行料だ。バーーはあそこ扉から出て行つたぞ」
入り口とは反対方向にある、ジャングルにふさわしくない、むしろ、何でこんなものがここに？的な扉を指差す。それだけ言うと、あまりのことと、ぞくぞくしたのでその場に座り込むアリスを置いてガーデンはそのジャングルの中へ消えて行ったのであった。
アリスのファーストキスは・・・結局男に奪われる運命にあつたのだつた。

「・・・・・」

1年生教室の窓際。最後尾。

アリスはそこに座り、誰もいない外を眺め・・・たそがれていた・

・・・

否。

グレていた。

「何でっ・・・男とキスなんか〜・・・！」

ふつふつと湧き上がる怒り。もう、どこにあたつたらいいのかわかりません。

ちなみに。

たそがれる彼のまわりには、彼の怒りの矛先となつた無残な机や椅子たちが散乱しているのでした・・・。

「くそ」・・・マジで何なんだよつーこにはーホモばつかかよつ・・・

・！

「あ〜、そうかもねえ」

「男だつて！言つたのにつー！」

「言つたのに？」

「キスしていくし・・・ー？」

「はるーー」

「うつうわああ……」

一人でいたはずのその教室で、いつの間にかアリスの独り言に付き合っていたのは・・・何かもつ。すべての元凶な気のするリアンであつた。びっくりしたアリスは、椅子から飛び上がって叫んだ。絶対。寿命が縮んだと思われる……。

「なになに～？そんな飛び上がるほど喜んじゃってさ～！」

相変わらずの。そのテンション。

「リ・・リアン・・・！？」い・・いつから・・・！」

心臓のドクドクという音が收まらないまま、アリスはリアンに問い合わせる。

「ん～？ずつと～」

ずつととはどこからなのか・・・。聞くのが非常に怖いアリスだつたが。それよりも。

「ていうか！－何なんだよーーー！」もう嫌だつ！－！－変な人間ばっかりじゃん！！

まずはこれでしょ～。

「まあまあ。そこはゼーヴリょうもないところだからさー。」
だつてそんなの俺じゃどうにもできないも～ん。あははははは
と、リアンはアリスの訴えをザッパリ流す。そして。
「ところでまあ、アリス！」

にこやかに。

「お茶しな～い？」

リアンといつその人は・・・斜め45度の角度から、くるのであつた・・・。

（続く）

第3話・庭とアコスとコアンとの思念-（後書き）

ガーデン登場。リアン再登場。お茶つて・・・。唇をついに奪われたアリス。次はどうなるー?お楽しみに

第4話～心のオアシスとの出逢い～（前書き）

ボーアズラブとなつております。苦手な方は「遠慮ください」。

第4話～心のオアシスとの出会い～

お茶しない？

ある時期に、若者がナンパの手としてよく用いた台詞。・・・今、こんな陳腐な台詞で女の子をナンパする男はいるのだろうか。

「まま、すぐそこだからさー！うまいよー！アイツの淹れる紅茶！」
しかも。

うんとも言つていない相手をかなり強引に引きずつていぐこの男。
・・。（しかも本人はとても楽しそう）

首根っこをつかまれ、引きずられながら、アリスは深いため息を
つくるのであった。

引きずられていつた先は保健室だった。

「何で保健室・・・」

「細かいことは気にしない」

リアンは相変わらず元気に扉を開けた。

「マスター！お茶いれて〜

そこにいたのは。

「ああ、リアンさんですか。いらっしゃい」

爽やかな風がその人のまわりにだけ吹いているような。そんな柔らかくも涼しげな青年であつた。センターわけしたさりげらうな栗色の髪と涼しげな目元。優しい笑顔。ノンフレームの眼鏡もよく似合つていてる。

「さ・・・爽やか青年だ・・・！」

思わずつぶやくアリスであつた。

そんなある意味、失礼極まりないアリスに対し、マスターなる青年は嫌な顔ひとつせずにアリスを迎える。

「おや、お客様ですか。ここにちは。僕はマスターと言います。

今、お茶をいれますね

ふんわりと向けられる笑顔と言葉に。

「初めてまともな人と会つたよーー！」

思わず感涙。

「お~い！」

おがむようにマスターを見つめるアリスに。横からリアンがつっこむのであった。

ゆったりと流れる時間。お湯の沸く音と、部屋中に香る紅茶の茶葉の香り。揃いのティーセットは女の子が見たら飛んで喜びそうな物だった。たとえ場所が、その雰囲気にそぐわない保健室であつたとしても。ティーセットの並ぶそのテーブルや椅子が、学校の備品であつたとしても。まるでそこだけ、英國の風がふいているようだつた。

「はい、どうぞ。熱いですから気をつけてくださいね」

おいしそうな紅茶がアリスの前に置かれる。

「はい、リアンさん」

その次に、リアンの前に置かれる。

「サンキュー！」

そしてどこまでも、なこの男。

氣を取り直し、アリスはいれられた紅茶を飲む。

「・・・・! おいしい!」

今までインスタンントの紅茶しか飲んだことのなかつたアリスは、マスターの茶葉からいれた紅茶のおいしさに、思わずそうつぶやいた。

「そうですか？ ありがとうございます」

そのつぶやきに、にっこりとマスターが笑顔を返す。

アリスは一時の間、この現実を忘れマスターが作り出す温かい雰囲気に身をゆだねるのだった・・・（現実逃避ともいひ）。

現実逃避から20分後。

「そういえば、アリスさんは向こうの世界の方ですか？」

談笑をしながらお茶を飲んでいると、ふと、マスターがそつと云つた。

そこで。

よひやぐ。

アリスはお茶を飲んでいる場合ではないことに気付くのであった。

「あーーーそうーーーそうなんです！俺、シンクロとかないといけなくて・

・・！」

何杯目かのおかわりした紅茶を飲み干して。アリスはマスターに自分の立場を説明しようとした。

シンクロした世界を元に戻して。

普通の世界に帰りたいんです。

そのためには親玉に会わなくちゃいけなくて。

それにはまず、バニーを捕まえなくちゃいけなくて。

切々と、説明。それをマスターは静かに聞いていた。そして。すべてを説明し終わつた時・・・。

「バニーさんなら、職員室じゃないですか？というか・・・親玉つていうのはクイーンさんのことですよね？クイーンさんも職員室にいると思いますよ？」

今までの・・・俺の苦労つていつたい・・・。

アリスの脳裏は一瞬真っ白になつた。

だつて・・・職員室つて。確か。アリスとバニーの追いかけっこが始まつた場所だつたのでは・・・。

「ねえ、リアンさん？」

マスターが同意を求めたその先の相手に。

アリスは我に返つた。

「はー？何ーーーリアン知つてたのーーー？」

がたんと椅子から立ち上がりアリスはリアンに詰め寄る。リア

ンは飲みかけの紅茶のカップを持つて椅子「J」と一歩下がる。

「ん？ いやさて」

ぱりぱりと頭をかきながら。

「さつき思い出したんだよね～！～！」

あははははと、高らかに笑うその男は。きっと最強なのだわいと。アリスはへコみながら思つのであつた。

「まーそんな落ち込むなつて！居場所わかつてよかつたじやん！なあ、マスター！」

まつたく悪びれないrianに。

「よくない！～おかげで俺がどんな目に合つたと思ってんだよ～！」

半泣き状態で訴えるアリスに。

「人生、そんなこともあるって！」

全開の笑顔で、まつたく。何の根拠もないことを、言つてのけるのであつた。ていうか、親玉の名前、教えてなかつたつけ～と、あつけらかんと言いながら。

我関せらず、保健室を漁つてお菓子を探し出すrianをよそに。

その唯一の良心がアリスをなだめる。

「すいません。何だか、僕たちの世界の住人が迷惑をおかけしたみたいで・・・」

なぜいつも。あやまるのはまつたく。何にも悪くない人間なのだろうかと。世間の矛盾をこんなところで感じながら。

「職員室は保健室を出て、右に曲がつて階段を昇つたらすぐです」

優しく教えてくれるマスターを半ば本気で拌みそうになりながら。

「ありがとうございます！～マスターのおかげで・・・俺、がんばれ

そうです・・・！」

何でいい人なんだろうか。rianと違つて。

そんなことを思つるのは・・・失礼だろうか。

「いいえ。がんばってくださいね。可愛いアリスさん」

マスターはそう言つと、アリスの頬にちゅっとキスをした。

「・・・！」

アリスはそのマスターの行為に真っ赤になる。

「・・・あ・・ありがとうござります・・！」

しじろもじろになりながら。

でも、男にキスをされて嫌な気がまったくしなかったのは、マスターの人徳と言えよう。

アリスは応援してくれているマスターに感謝しながら、保健室を出て職員室を両指した（もちろんリアンは放つておいて）。

「・・・職員室・・・！」

マスターの言われた通りに来てみると、本当に、今までの苦労はなんだったのかと思いたくなるくらい簡単に田的地区へ着くことができた。

アリスは親玉もとい、クイーンと会うことに緊張しながらも、職員室のドアを開けるのであった。

「しつれいします！」

2回ノックに大きな声でご挨拶。

・・・しみついている。

がらりとドアを開いたアリス。

そして、職員室へと、踏み込むのであった。

く

／ 続

第4話～心のオアシスとの出合～（後書き）

次がたぶんラストですー!とりあえず、私の中では序章が終わる感じです。お楽しみに

第5話・最後の追いかけっこ（前書き）

ボーアズラブとなつております。苦手な方はご遠慮ください。

第5話・最後の追いかけっこ

職員室の中は・・・もはや職員室ではなかつた・・・。

「この表現は、とても正しいと思う。外見は職員室だが、中身は違うのだ。どう違うかっていうとそれは・・・。

「ここは・・・どこの王宮か・・・？」

そう、アリスが思わず呆然としてしまつよつた造りなのだ。

何？この赤い絨毯？

何？この落ちてきそうなほど大きいシャンデリア？？

何？この・・・

「・・・」

きょろきょろと室内を見回していたアリスは、壁際にいた人？と目が合つ。なぜ？マークかといつと・・・。

「・・・う、薄い？」

薄いのだ。と、いうか、これは・・・

世に言つ、トランプ兵つてやつじや・・・！

実物を見ると可愛くない。と、いうか。気持ち悪い。頭身は4頭身くらいか。

などと、しげしげと考へていると・・・

「貴様！侵入者だな！ひつとらえてクイーン様に突き出しちゃるー！」

アリスを見つけてからゆうに15秒。同じように止まっていたトランプ兵はアリスに向かつてそういうと、いきなり5枚（人？？）に分身し、アリスを囲む。

「や！ちょっと、待つてくれ！俺は・・・」

何だか怪しい雲行きに、話し合いの場を設けよつとするアリスだつたが・・・。

「どうえろ～～～！」

あえなく、その不思議な生き物によつて両手を縛られ、生け捕りにされてしまうのだった。

「よく見るとなかなか美人だな」

「クイーン様も喜ばれるやもしれん」

「クイーン様は美人がお好きだからな」

「俺、男なんだけど」

美人って何だよ。

「クイーン様はどこにおられるか？」

「奥のお部屋ではないか？」

「では、この者を献上しに行くとするか」

「つていうか、クイーンって……」

美人がお好きって……

レズビアン？？

ずるずるとトランプ兵に引かれながら。アリスはまだ見ぬ親玉、クイーンについて想像を膨らませるのであった。

どうやら、本当に親玉はクイーンと言つて、ここにいるらしい。何かよくわからない生命体にラチられてしまつてはいるけれど。クイーンの所まで運んでくれるなら手間が省けるかな。とか思つてしまふのは、平和ボケした日本で生まれ育つてゐるからであろうか。とりあえず。

シンクロを解いて、さつさと平穏な日々に戻りたい！！！！！アリスの願いは、ただもうそれにつきるのであった。

・・・あ～、なんとなく予感はしてたけどさあ・・・。

王広間の一段高くなつたその場所の。豪華な椅子にふんぞり返つ

ていたのは……。

クイーンといつた。

男であった。

クイーンといつよりはキングのほうがあつてゐるのでは?と言つたくなるようなその青年。その端整な顔は、どこか冷たいがとても印象的で一度見たら忘れるなどできないほどの美しい顔立ちだつた。いい男!まさにこの一言につくるような。人を支配することが生まれた時から決まつていたような、そんな雰囲気と風貌である。後ろは肩につくくらいまで伸びてゐるそのブロンズがその端整な顔を引き立ててゐる。

そして。そのまわりには……。

美男子が囮んでゐる……。

何か?あれか?この世界はホモばっかりか?

ちよこつと投げやりになりながら、アリスがそんなことを考えてゐると。尊大なクイーン様がアリスに話しかける。

「お前、名前は?」

「佐久間アリスです……」

なんかもう。この後の展開もだいたい予想できちゃうしね。

「俺の側室にならないか?」

はいはいきましたよ。つーか。俺はそんなこと微塵もー・望んでねえつーーの!—!

「辞退します」

さらりと受け流すアリス。

「くく。まあいい。で?何か言いたいことはないのか?何もなければ外へ放り出すが

この男もさらりと恐ろしいことを語つてくれる。

「シンクロを、解いてほしいんですけど……」

アリスは、クイーンに。ついに。長い長い道のりを経て。この言

葉が言えた。

「・・・嫌だ」

半分どうでもよさそうに、クイーンはアリスに言った。

「何でだよーシンク口解いてもらわないと困るんだよ・・・」

アリスは食い下がつた。

何よりも！ここにいたら精神状態があかしくなるー！

俺は男で！..女の子が好きなんだよ！..

なんだかちよつと、そこかよ！とつっこみたくなるような理由を思つアリスであつたが・・・。

「俺はここが氣に入つたんだよ。だから。今のところシンク口を解く氣はない」

しつと話すクイーン。

「あんたの氣に入った氣に入らないでいつまでもこの状態を作つてもらつても困るんですけど・・・俺の友達やクラスメートが、空間をさまよつてるんです・・・助けてやつてもれえませんか」

これも本当。

何とか考えを変えて欲しい。

元の世界に戻りたい。

そんな、アリスの思いが伝わつたのか・・・。

「・・・わかつた。シンク口を解こう」

頭を下げて頼むアリスに、クイーンが言つた。

「え・・・！本当ですか！？」

アリスはそのクイーンの言葉に顔をほころばせる。

「ただし。条件がある」

やつとの思いでクイーンのところまで辿り着いたアリス。シンク口を解いてもらおうとしたが、クイーンは簡単にはシンク口を解いてくれなかつた。

「条件とは・・・」

「時間内に、このバーを捕まえることだ」

制限時間30分。その時間内に、（いつの間にか現れた）バーを捕まえること。それができれば、シンクロは解く。

ただし。

それができなければ・・・

「お前には、俺の側室にでもなつてもうつかな死んでも・・・捕まえなければ・・・」

アリスは切にそう感じた。・・・身に詰まるとはまさにこのことだね

スタートラインは職員室前の廊下。またまた不思議なこの空間では、いつの間にそくなつたのか。先が見えないほど長く廊下が続いていた。本当の、追いかけっこである。そして横を見ると・・・どこまでも余裕なバーがぴょこぴょこしている。

・・・人がピンチを感じまくりな時にこのウサギもどきめ・・・首ひねつてやるうか・・・。

何て怖いこと考えてみたりみなかつたりしながら。トランプ兵によつて両手の拘束が解かれる。

「せいぜい頑張つて追いかけろよ」

ムカつくほど憎たらしい笑みを浮かべながら、クイーンはアリスにそう言つた。

「俺のベッドで死ぬほどよがらせてやるから」

さらりと放送コードにひつかかりそうな台詞を吐くこの尊大な男に。これが女ならメロメロの腰ぐだけなんだろうな、と思いながら。

「・・・俺は男だつの」

いつたい日に何度もこの台詞を口にすればよいのか。ていうか、まあ、この格好のせいだよな！うん！…と、一人で無理やり納得しな

がら。

男だと言つてゐるのに相変わらず。

「だから何だ」

まったく気にしないこの連中のめ……。

腕組をして、ニヤニヤしながらクイーンはアリスとバーーを眺めている。

その中で。

「では、いきますぞ！」

トランプ兵の高らかなトランペッタの音が廊下に響き渡り（大げさなんだよ！）。

「よ～～～い！」

ドオン！！

ピストルの小気味よい音が響いた。

そして。最後の追いかけっこが始まった……。

まっすぐに伸びた廊下はバーーまでも続き、アリスはその長い髪とスカートをはためかせながら前方を走るバーーを追いかける。

というか。何で一緒にスタートしたのに、こんなに差ができるかな……。

必死に走つて追いかけるアリスをよそに。あきらかに。前方のウサギは余裕である。後ろを振り向きながら、時には後ろ向きに走りながら・・・、アリスの怒りのバロメーターをあげてくれる。

「この・・・くそウサギ～～」

それなのに、一向に縮まらない距離……。どんな走りつぱりだ。このウサギは（注：ウサギではありません）。

そんな殺伐とした中を走りに走り続け。

「残り5分です！」

どこからか現れたトランプ兵がそう告げる。

残り。5分。

ヤバイ。

非常にヤバイ。

もう20分以上も走り続け、しかも、その前にも走り通しのアリストのスピードはあきらかに落ちまくっている。決定的に距離があかないのは、バニーがそんな様子を楽しみながら微妙な間隔を取つて走っているからである。そんな状態で、残り5分でバニーが捕まえられるはずもない。

てことは何か・・・?

シンクロはずっととかれないまま・・・

あまつさえ、俺は・・・

クイーンという名の・・・男の側室・・・。

「嫌だッ・・・! 嫌すぎるッ・・・! -! -!」

背中を流れる嫌な汗を感じながら、前方のバニーを見据えると・・・

・。

「きゅ！？」

・・・・こけた。

「うなれば。あー、ほらー後ろ向ひで走つてゐからドショウ
がない子ねー。とい

うやつである。

びたんと硬い廊下にこけ、小さなバニーはきゅーきゅー泣き出しだ。

「お、おいー大丈夫か！？」

さすがに、泣いている子ビもには弱い。アリストは、泣いているバニーに近づく。

これは、しかし。思わぬ形でアリストに幸運の女神が微笑んだようだ。

「どうか、けがしたのか？おい、バー？」
やつと追いついて、バーを心配し、肩に手をかけようとした瞬間。

「じちゃん！」

盛大な。音がした。

「きゅっきゅ～！」

先ほどまでうずくまつて泣いていたバーは一転。がぜん元気。
逆に、アリスはどうと・・・。

「いつてエ～～・・・！」

バーに思いつきり。すねを蹴られた。

そう、バーはこけるふりをし、嘘泣きをし。あまつさえ、アリスのすねを思いつきり蹴ってくれたのだった・・・。

そして、まったく悪びれるはずもないバーは、アリスから安全距離を保ち、離れると。

アリスに背を向けて。

「何・・・？」

痛みの中で、半泣きになりながらアリスの見たものは・・・。

おしゃりベンベン。
あつかんべ～。

だつた・・・。

「ははははは！してやられたなあ！」

その模様を。クイーンは先ほどの大広間にモニター観戦中。クイーンにとつても意外なバーの行動に、果ては腹を抱えて笑いはじめた。

「くくくく・・・、側室は近いなあ。アリス・・・」

モニターの前でほくそ笑みながら。

もう誰が見ても、この追いかけっこ結果はあきらかで。

あとは、タイムリミットを待つだけ。

というか、その時間すら無駄？

と思つてしまふような、この状況で。

「シンの・・・くそウサギ～～・・・」

ママのよくな・・・

「テメー・・・いいかげん・・・」

ふつぶつと恐ろしい、アリスの怒りが。

「ブチ切れたぜ・・・」

こんな3歳児に、キレることはないさ。
つか、んなことできつかよ。

そう思つてきたアリスだつたが。

「いいかげん・・・おいたが過ぎんじゃねえの・・・？」

悪いことをしたらおしおきだよな。

一人でぶつぶつ言いながら、アリスはすくっと立ち上がる。

その瞳には・・・怒氣が・・・。

前方でアリスをからかっていたバニーにも、その怒氣が伝わったらしい。バニーはピクリともせず、アリスを見てたたずんでいる。アリスは、そのバニーに対して。

大きく深呼吸をしたあと・・・。

「てめー！このくそウサギ！――誰に喧嘩うつてやがんだ！――いかげんにしやがれ！――その耳引っこ抜いて誰に喧嘩うつたか体でわからせてやるからな！――ガキだからって誰が容赦するか――！」

一步、一步と言ひながらゆづくアリスはバニーに近づく。

それに、一歩ずつ後ずさりを始めたバニーに対し……。
「ウサギ！一人の許可なく、勝手に動くんじゃね～！！！そこで止
まって待つてろ！！」

びしつと、バニーに指を差して。

「これ以上！俺に逆らうんじゃね～～～！！！」

どつかんと、大爆発・・・・・。

はー、はーと、肩で息をするアリスに・・・。その場で固まつて
いるバニー。

そこまで言つてようやく少し落ち着いたアリスは、ちよつと言い
すぎたかな？なんて、後の祭りなことを考えながら。いややはや、
相変わらず、キレると手のつけられないこの男。

「あ～・・・おい？」

固まるバニーに、声をかけようとした、その次の瞬間。

「きゅきゅきゅう～～～～～！」

何と。

バニーは。

アリスに向かつて全速力で走つてきた。

「な・・な・・・・！？」

そして。

アリスへ向かつて盛大にジャンプ！

「うわあ！？」

バニーは、アリスにくつつき、すりすりと頬をすりよせている。

それはもう、あなたにメロメロよん。という感じで・・・。

「ど・・・どうなつてんの・・・・？」

いきなりの展開に、アリスはどうしていいかわからず呆然とする。

「よかつたじやん、アリス！」

すると、後ろから突然声をかけられる。

「・・・・・アン！？」

振り向くと、そこにまじつでもビードも神出鬼没、なリアンがいた。

「バニー捕まえたんだね～す」こす」、「

本当にそう思つてんのか？と思つよつた言い方なリアンだが。それよりも。

「ど・・・じゅこと？これ・・・？」

アリスは、自分の胸の中にいるバーーを指差してリアンに問うた。

「あ～、それね

ふふふと、リアンは笑いながら。

「バニーはねえ、マゾなんだよ
マゾ。

「」の歳でマゾとかおつかしいよねえ！」

あはははは！と笑いながらアリスは。と、こうじとは何か？

「俺は女王様かよ！！！」

冷静につっこむアリスだが。

「よくわかつてんじやん。さっきのアレ！女王様以外の何者でもないでしょ～～！」

ちょうど、自分の性格について見直す、といつか、今後考えていくたいと思つます・・・。

そう、思わずにはいられないのであった・・・。

「ああ、バニー、アリスから離れな

ひとしきり笑つたあと、リアンはバーーにそついた。バーーは、それに対し、嫌々と首を振る。

「しばらく」のままかなあ

原因のこつたんであるアリスは、苦笑いを浮かべながらバーーを見つめる。

しかし。

「だめだよ

リアンは、いつになくまじめにそう答えた。

「え？」

「だって、アリスはバーーを捕まえただろ？」

「バニーを捕まえるところ」とは……。

「あ……！」

「クイーンも、モニターで見てたはずだから。ほら」あたりを見渡すと、空間がガラスのようにかけらになつて少しずつ崩れていっている。

「もう、元の世界に帰らないとね」

リアンはそういうと、バーーをアリスから引き離す。

「きゅきゅ……！」

バーーは半分泣きながら、アリスに手を伸ばしていく。

「リアン・・・バーー・・・・」

何だか、夢のような時間だった。

いろんなことがあって、頭の中は今でもぐちゃぐちゃだけど……。

何だか、元に戻るとなつたら、少し寂しい気もある。

「ほら、バーー、アリスにお別れしな」

バーーは嫌々をし、聞かない。

そんなバーーの頭をなで、そして、アリスは。

ちゅつと、バーーの額にキスをした。

「かなりムカついたけど……追いかけっこ、楽しかったぜ。バーー

ー

」「ひとつと、バーーに微笑む。それに、バーーは大人しくなる。

「リアンも、世話になつてないけど、ありがとな！」

「そうくるかい」

どちらからともなく、静かな笑いがこぼれる。

「マスターたちにもようしく。思えば、貴重な体験だつたからさー」

「何ならまたするかい？」

「はは……考えとくよ」

まさしく。解決したから言える台詞であろう。

そして、空間が歪みだす。

「じゃあね、アリス」

「じゃあな。リアン、バニー」

すると、バニーはリアンの腕の中から逃れ、アリスの元へ駆け寄る。

「バニー！」

止めようとするリアンの声を背に、バニーは、ポケットから小さな石を取り出した。

きらきらと光の当たる角度によって変化するその石の色。見たことない石だつた。

「くれるのか？」

アリスが聞くと、バニーは「くぐりとうなづいた。

そして、その石をアリスに渡すと、リアンの元へ帰つた。

2人が、手を振つている。

その2人を、大きな光が包み込んだ……。

「・・・・・」

遠くで誰かの声がある。

「お～・・い」

光が、入つてくる。

「佐久間！おいつてば！」

アリスは、目を覚ました。

「ここ・・・は？」

目の前には、見慣れたクラスメートの姿。

「お～い！寝ぼけてんじゃね～か？家庭科室だろ？てか、衣装合わせの最中に寝るなよ！」

ははははと、他のクラスメートたちも笑う。

いつもの、風景。

「やっぱ似合うね～」

いつもの、声。

「別にメイク、いらなくね？」？

今までのは・・・夢だったのか・・・？

「ほら、いつまでもソコにいないで、出て来いよ！細かいところ直すから」

「あ、ああ」

アリスが立ち上がった時、ポケットから、何かが落ちた。

「これは・・・」

その石は、まぎれもなく、アリスがバーからもじりつたものだつた。

こうして、アリスは無事元の世界に戻ったのであった・・・。

一つの、大きな思い出とともに・・・。

～END～

第5話・最後の追いかけっこ（後書き）

完結しました！アリスな世界！今まで読んでくださった方々、ありがとうございました！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1090a/>

アリスな世界！

2010年10月8日15時05分発行